


# 六花

2

俳句雑誌りつか  
2012 (平成24年)  
Cover Dress of Little Bird



早く母を見舞わねばと

母遠し櫓炬燵に目覚めては  
一月や移設されぬし父の句碑  
底冷や父の出湯の碑をなでて  
悴める指持て骨を埋めにけり  
鬼来ると霜の藁塚させる母  
襟巻を母に巻きやる手も老いぬ  
仏蘭西料理共に老いたる夫婦して  
寒風に揺さぶられぬる言葉かな  
寒灯に囲まれてゐる燧灘  
石鎚の麓に星の凍えけり

碑に会釈返しの時雨かな

洋司君の土産に

胸に当て冬着に母の笑み給ふ  
石に耐へ寒の金魚の眠りけり  
母上は悴める手で子をつかむ  
三十と四十の孫や寒見舞  
セーターのおとうとに兄老いにけり  
白息や兄は眼鏡で大頭  
弟は白髪ふさふさ寒波来る  
寒月や瀬戸大橋にひと休み  
遠山に雪置くのみの内子かな  
フルートの音のごとく葱白かりき

# 深秋や芝を染めたる松の影

志方 章子

しんしゅうやしばをそめたるまつのかげ しかたあきこ

とんぼうの影見上ぐれば何もみず

咳のたび鼻風船のふくらむ子

山中に迷ひ十月桜かな

寄植をせし覚えなき草の花

松の影が芝を染めたと言う意外性がない。深秋の黄色がかった芝を緑に思わせる力があるではないか。笹村さんは十二月号で「大橋の影はむらさき」と断定して言ったが、深秋の句はその色を読者に委ねていながら「緑色」であると認識するよう誘導している。その強さがある。秋が深まり木々は紅葉し、山々が装う錦秋になった。その中に色を変えぬ松の緑が際立つ。それは「色変えぬ松」という季語にさえなっている。その色を変えぬ松の緑に先達は注目していたのだ。その色変えぬ松の緑を踏まえるよう仕組んであるのだ。いいね。

# 白菊のいのち永きといふものを 藤生不二男

しらぎくのいのちがながきといふものを ふじおふじお

渡り鳥逝つてしまひし人のあり

山眠る高みへ向ふ鳥一羽

短くもこの詩いとほし冬堇

抜きんづる塔一つあり初時雨

渡り鳥逝つてしまひし人のあり  
白菊のいのち永きといふものを  
山眠る高みへ向ふ鳥一羽  
短くもこの詩いとほし冬堇  
抽んづる塔一つあり初時雨  
いずれもことり追悼の作品と思われる。  
挨拶句として優れているのは、「白菊」「山眠る」「初時雨」の作品。白菊の句は褻(ケ)ではあるが、惜しむ気持ちがかもつている。挨拶句というのは即かず離れず、微かに匂わせるもの(暗喩)がよい。なかなか実力ありの人である。「渡り鳥」の句は直喩。ことりも挨拶句で俳句の実力が判ると言っていた。褻は編集後記に述べる。

雪 卿 集

月の杖

笹村政子

木漏日を啄みぬたる冬の鳥  
地に還る音のかるさよ落葉搔  
眠りゐる山を撫でゆく温泉ゆの煙  
丹波路や山へ消えゆく山の霧  
オルガンの余韻を歩く月の杖

衣被

松本文一郎

長き夜の短き知らせ佳人逝く  
一合の酒にこそ合ひ衣被  
落鮎や宿に古りたる箱眼鏡  
黄落や生田緑地の鬼ごつこ  
辻棲の合ふも合はぬも良夜かな

日向ぼこ

貝森光洋

しばらくはことりの懐ろ日向ぼこ  
三毛猫をまああるく撫でて日向ぼこ  
これ以上なき貌をして日向ぼこ  
日向ぼこ彼の世この世を歩き来して  
まんまるな口して木偶の日向ぼこ

無 月

梶浦玲良子

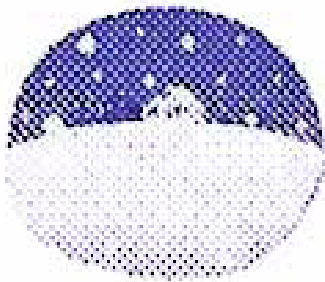
似てゐても似てゐなくても案山子かな  
段畑の雲形定規ほたる草  
贅さがす日暮や鴟の捨て台詞  
泥田より瓢とり出す影法師  
床の間の花あたらしき無月かな

雪 卿 集

時 化

佐津のぼる

事務始既決未決の書類分け  
突堤に時化の荒波冬深し  
菰卷やゆるまぬものに角結び  
山腹にひつそりと墓地冬すみれ  
鳴く鳥のゐてはなやげる冬木立





せつじゆしゆう  
雪樹集

蟻  
蜂

中腹を真一文字に霧走る  
大空に鴟の合図の響きけり  
虫たちを黄色で寄せて菊香る  
立冬を頬で感じてをりにけり  
暖房の部屋に飛び込む帰りかな

筒井八重子

湯の柚子を追ひかけてゐる夜が楽し  
下着類冬日にまかせ乾かせり  
年の暮あれこれ用事重なりぬ  
落葉踏み登る階段背な温し  
朝の露さつと落して登校児

# 蛍雪譚 六甲

丹波路や山へ消えゆく山の霧

笹村 政子

丹波路のではなく丹波路やだからこそ俳句になった。

「の」では報告。「や」で切ったから、丹波路「らしいなあ」と感動しているのだ。その「らしいなあ」というのが、山へ消えゆく山の霧に係（呼応）るのだからなのだ。それを「丹波路の」としてしまえば、「丹波路の霧は山へ消えるのですよ」となって、ただの報告になり、読者は「ああそうですか」という感想しか持たないのだ。当（まさ）に「切れ」の効果が句の内容を大きくする証し。俳句の醍醐味なのだ。最近の俳句は「や」「けり」を避ける傾向があるが、そのような俳句は新しいのでも何でもないことをしつかりと認識しないといけない。俳句には形も確かに大切だが、外見や言葉遣いを新しくしても内容が陳腐であっては却って古い俳句。平凡でも掲句のような大きい俳句を目指すべきである。

木洩日を啄みぬたる冬の鳥

この作品も鳥の啄む対象を木洩日としたのが佳い。ただ惜しむらくは笹村さんには既に「橋脚の影を耕す」の秀作があるので自己類想のきらいがないわけではないが、しかし「橋脚」の作品は物覚えの悪い六甲がしっかりと覚えていくくらいだから、よほどの名作ということだ。

# 六花集

み	初	冬	手	夢	澗	二	朴	や	こ	山	抽	短	白	渡
の	時	立	さ	な	井	上	落	や	の	眠	ん	く	菊	り
虫	雨	つ	ぐ	か	戸	の	葉	前	花	る	づ	も	の	鳥
や	か	や	り	ば	の	山	天	に	野	高	る	こ	い	逝
一	さ	落	に	雨	蓋	の	よ	傾	あ	み	塔	の	ち	つ
所	を	葉	香	の	に	際	り	ぐ	げ	へ	一	詩	永	て
住	出	の	り	した	猫	ま	葉	櫛	て	つ	つ	い	き	ま
在	す	群	こ	た	寝	で	書	塚	こ	向	あ	と	と	ひ
の	人	れ	た	たる	る	刈	届	紅	と	ふ	り	ほ	い	し
夢	走	て	る	案	秋	田	く	葉	り	鳥	初	し	ふ	人
の	る	走	る	山	思	か	か	散	を	一	時	冬	も	の
内	人	音	菊	子	か	な	な	と	悼	羽	雨	堇	の	あ
				か	な			る	み				を	り

菊  
谷  
潔

平  
居  
滯  
子

藤  
生  
不  
二  
男